

ダウン症幼児の象徴遊びの発達に関する一考察

細川かおり* 池田由紀江**

本研究はダウン症幼児の象徴遊びの観察により、ダウン症幼児の象徴遊びの発達特徴を明らかにすることを目的とした。発達年齢1歳6ヶ月、2歳6ヶ月のダウン症幼児の象徴遊びの発達を、同一発達年齢の健常児と比較検討した結果、以下のような結果を得た。

1. 象徴遊びの出現量は健常児と変わらずDAに従うと考えられる。
2. 象徴遊びの質では、特に発達の高次と考えられる項目がなかなか出現せず、発達年齢を指標にしてもさらに遅れる傾向にあった。
3. 象徴遊びの発達における下位項目の出現順序は健常児と同じである。

キーワード：象徴遊び ダウン症 幼児

1. はじめに

遊びは子供の生活の中心であり、子供の発達にとって、遊びの果たす役割の重要さは誰もが認めるところである。一方、精神遅滞児の遊びには、なかなか遊ばない、遊びが単一でなかなか発展しない等の問題がある。

象徴遊びは幼児期に特有の遊びであり、また、治療教育への適用も報告されている (Jeffrey & McConkey, 1974, 1976; McConkey & Jeffrey, 1979, 1980; 池田, 1982)。本研究では、診断が早期になされるため早期教育の対象となりやすいダウン症幼児を対象にし、象徴遊びを観察することにより、ダウン症児の象徴遊びの発達特徴を明らかにすることを目的とする。

本研究では象徴遊びを「子供が現実のもしくは想像上の経験を事物、身ぶり等で表象する遊び」と定義する (臨田, 1982)。Piaget 以来象徴遊びを認知発達の視点から促えた研究が多くみられるが、Piaget (1945/1967) は、象徴遊びは感覚運動期の第6段階ではじめて生じると指摘している。そして、これは象徴機能の最初の明瞭な出現であり、象徴遊びの発達には象徴機能の発達が考えられるとしている。

1970年以降象徴遊びの研究は急増したが、健常児の象徴遊びの発達傾向に関しては、主に「事物使用」(脱文脈化)、「遊びの対象者」(脱中心化)、「遊び行為の連鎖」(統合化)の3点から研究されてきており、各下位スキルの出現順序も明らかにされてきた (臨田, 1982; Fein, 1981; Nicolich, 1981)。事物使用に関しては、Simada (1981) の18名の幼児についてのCA12~24ヶ月までの縦断的研究では、模倣的使用^①は12ヶ月頃から、見たて使用^②は13~16ヶ月頃からそれぞれ出現が認められたが、身ぶり使用^③は主に2歳台でみられるであろうとしている (①②③については Table 2を参照のこと)。遊びの対象者に関しては、CA15, 18, 21, 24, 30, 36ヶ月児を対象に遊具で遊ぶ場面を観察したLowe (1975) は、低月齢児では自己対象の行動が優位であるが、21ヶ月以降は人形対象の行動が優位であったとしている。また前述のShimada (1981) によると、自己対象は12ヶ月から、他者を単に自己の行為の受け手として扱おう受動的他者は14ヶ月からそれぞれ出現が認められたが、24ヶ月までは自己対象が優位であったとしている。遊び行為の連鎖に関しては、単一行為から複数行為の連鎖という出現順序が認められている (Lowe, 1975; Nicolich, 1977; Shimada, 1981)。

一方、精神遅滞児の象徴遊びの発達に関する研

* 心身障害学 研究科

** 筑波大学

Table 1. 被験児の構成

	Age Group	N Sex. (M/F)	DA(SD)	CA(SD)	DQ(SD)
ダウ ン 症 児	1歳6ヶ月	8 (5/3)	20.1(3.03)	32.1(9.41)	68.1(17.38)
	2歳6ヶ月	10 (4/6)	30.7(4.27)	41.9(9.73)	71.5(11.04)
健 常 児	1歳6ヶ月	10 (4/6)	19.7(1.83)	20.2(2.57)	97.9(10.44)
	2歳6ヶ月	10 (4/6)	34.1(4.35)	29.5(3.81)	114.8(11.70)

(CA, DAは, 月齢)

究は少ないが、精神遅滞児の象徴遊びの発達はCAよりもMA, DAに相関することが認められている(Hill & Nicolich, 1981; Jeffree & McConkey, 1976; Wing et al, 1977)。また、Hill & Nicolich (1981) は、Nicolich (1977) が提唱した事物使用、遊びの対象者、遊び行為の連鎖の各スキルを統合した5水準を用いて、MA12~36ヶ月のダウン症児30名の象徴遊びを評価した結果、象徴遊びの発達過程は基本的には健常児と同じであろうことを示唆した。笹生(1981)も、MA 2歳と4歳の健常児と精神遅滞児を対象に見たて使用について実験的に検討した結果、発達順序には差がみられなかったと報告した。さらに、同一MAであっても精神遅滞児の発達は健常児の発達に遅れることを示唆している。本研究においても、ダウン症児の象徴遊びの発達は、CAよりもDAに関係するであろうこと、しかし、発達過程は基本的に同じであろうこと、また、DAで予測されるより遅れるであろうことが予測される。

さて、本研究の接近法についてであるが、ダウン症児の象徴遊びの発達特徴を明らかにするために、「遊具の使用」、「遊びの対象者」、「遊び行為の連鎖」の3点から全体的に促える。象徴遊びの評価測度としては、象徴遊びの各スキルを統合したNicolich (1977) の5水準は、Hill & Nicolich (1981) が水準2と3を同時に遂行したダウン症児がいたことを指摘しており、また、Shimada (1981) も5水準の一部が支持されなかったと報告し、さらに検討が必要であると指摘しているため、本研究では、「遊具の使用」、「遊びの対象者」、「あそび行為の連鎖」を別々に観察したShimada (1981, 1979) を参考に行なう。

2. 方 法

1) 被 験 児

ダウン症児18名(男児9名, 女児9名)および

健常児20名(男児8名, 女児12名)を対象とした。津守式乳幼児発達質問紙により測定されたDA(発達年齢)により、各々1歳6ヶ月群と2歳6ヶ月群を設けた(Table 1)。なお、ダウン症児は全員、ダウン症児のための早期教育プログラム(池田, 1982)に参加しており、また、被験児は全員家庭養育児であった。

2) 遊 具

以下の遊具を用いた。犬(高さ13cm)、人形(高さ22cm)、茶わん、皿、カップ、はし、手鏡、くし、歯ぶらし、布製のバック、小枝(長さ25cm)、スポンジ、しわくちャの紙(15cm×15cm)、ふたつきの茶かん、ハンドタオル。

3) 手 続 き

観察は筑波大学内の小プレイルームで行なわれた。この小プレイルームは広さ3m×3mで、窓、ワンサイドミラーがある。

観察は母親と子供の一組づつ行なった。まだ母子分離ができない子供が多いため、また、遊びの対象者となってもらうために母親に同室してもらった。遊具は部屋の中央に提示しておく。母親、子供に入室してもらった後、母親には、遊ぶことを促したり励ましたりすることはできるが遊具の使用方法は指示しないこと、被験児への対応は誘いがあった時にのみ受動的に行なうことを教示した。なお、これらの教示に母親が従っていなかったペアは分析の対象から除いてある。

4) 記 録

被験児が遊具で遊びはじめてから10分間をビデオカメラ(SONY BETAMOBIE BMC-100)で、ワンサイドミラーを通して録画した。録画したビデオテープは1秒単位の時間表示を入れながら転録し、5秒を1単位として所定の記録用紙に行動(Table 2)を記録した。

5) 象徴遊びの測度

象徴遊びの測度として以下の項目が用いられた。

Table 2. 象徴遊びの定義

定義	現実の、または想像上の経験を、事物やジェスチャーを使用して表現する行為。	
遊具の使用	模倣的使用	用途が一定の遊具を、その用途に応じて使用する。 (Ex. カップから飲む。)
	見たて使用	ある遊具を、他のもののかわりに使用する。 (Ex. はしのかわりに小枝で食べる。)
	身ぶり使用	そこにはない物を、あたかもある様に使用する行為。 (Ex. 母親に、想像した物をあたえる。)
対象者	自己	自分自身にむけられる行為。 (Ex. 自分で、カップを持ち飲む。)
	受動的他者	母親、人形などを、子供の行為の単なる受け手として扱う。 (Ex. 人形の口にカップを近づけ、飲ませる。)
	能動的他者	母親、人形などを、実際にその行為に参加させる。 (Ex. 母親にカップを持たせ、飲むように要求する。)
連鎖	(1) 1つでも意味のある使い方ができる遊具類を、2つ以上適切に関連させて、行う象徴遊び。(Ex. タオルで人形をくるんで抱く。) (2) 遊具が1種類であっても、2種類以上の行為を関連させながら連続的に行う象徴遊び。(Ex. 人形をふとんの上に寝かせ、その後起こし、ふとんをたたむ。)	

(1) 象徴遊びの出現率

$$\frac{\text{象徴遊びの出現単位}}{\text{全単位}} \times 100$$

で求めた。

(2) 遊具の使用

全象徴遊びの出現単位数のうち、模倣的使用、見たて使用、身ぶり使用の示す割合、および出現人数。

(3) 遊びの対象者

全象徴遊びの出現単位数のうち、自己、受動的他者、能動的他者の示す割合および出現人数。

Table 3. 象徴あそびの平均出現率

群	年齢	1歳6ヶ月(SD)	2歳6ヶ月(SD)
ダウン症児		22.0 (9.29)	24.9 (7.63)
健常児		20.1 (5.08)	27.7 (8.97)

(単位%)

Table 4. あそび行為の平均種類数

群	年齢	1歳6ヶ月(SD)	2歳6ヶ月(SD)
ダウン症児		3.9 (2.17)	4.9 (1.49)
健常児		4.0 (1.76)	4.3 (1.52)

(4) 遊び行為の種類

観察時間内に出現した異なった遊び行為の種類および種類数。

(5) 遊び行為の連鎖

連鎖した遊び行為の種類および出現人数。

5) 観察の信頼性

2名の観察者(内1名は筆者である)が個別にダウン症児1名、健常児1名の行動のチェックをした後、信頼性が求められた。信頼性は遊具の使用、遊びの対象者について各々チェックした120単位についての一致率を求めた結果、信頼性係数は0.82~0.85の間であった。その後筆者による観察の安定性を求めた。1ヶ月後に行なった行動のチェックとの間の信頼性係数は0.85~0.92であった。よってデータの分析は筆者ひとりで行なった。

3. 結果

1) 象徴遊びの出現率

象徴遊びの平均出現率を Table 3 に示す。象徴遊びの平均出現率は4群が20.1%~27.7%の間にあり、ダウン症児群、健常児群の差はほとんど認められなかった。また、2歳6ヶ月群での増加を予想していたが特に認められなかった。

2) 遊び行為の種類

観察時間内に出現した遊び行為の平均種類数を Table 4 に示した。遊び行為の平均種類数は4群が3.9行為から4.9行為の間にありダウン症児群、健常児群の差は認められず、年齢群による差もまた認められなかった。

50%以上の被験児にみられた遊び行為は「食べる」「髪をとかす」で、全体に日常生活でよく行なわれる行為が多かった。

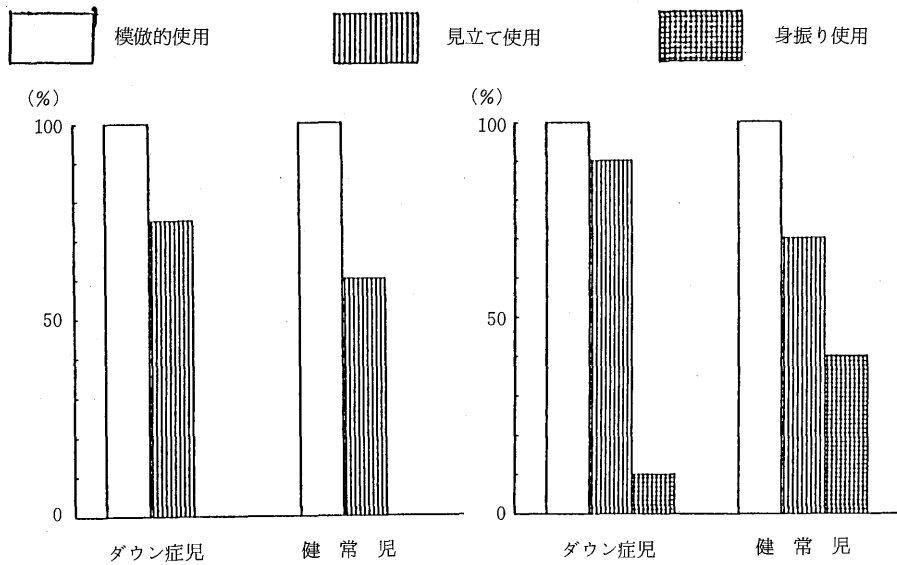


Fig. 1. 1歳6ヶ月群の
玩具の使用の出現人数の割合

Fig. 2. 2歳6ヶ月群の
玩具の使用の出現人数の割合

3) 玩具の使用

玩具をどのように使用して遊ぶか、玩具の模倣的使用、見立て使用、身ぶり使用の3つに分類して検討した結果をFig. 1, Fig. 2に示した。模倣的使用はFig. 1のように1歳6ヶ月群ですでにダウン症児、健常児全員に出現が認められた。見立て使用は1歳6ヶ月群、2歳6ヶ月群共に、ダ

ウン症児群は健常児群に比べてわずかに高い出現人数の割合を示しているがほとんど変わらない。身ぶり使用は2歳6ヶ月群ではじめて出現が認められたのであるが、健常児群にのみ有意な増加が認められた ($\chi^2=5.00, df=1, p<.025$)。つまり、ダウン症児は、模倣的使用、見立て使用は同DAの健常児と同じように出現するが、身ぶり使

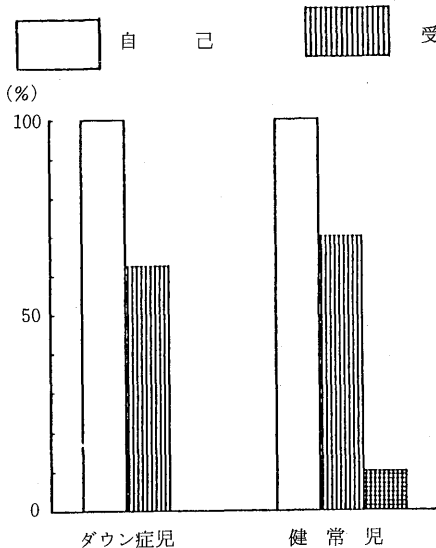


Fig. 3. 1歳6ヶ月群の
対象者の出現人数の割合

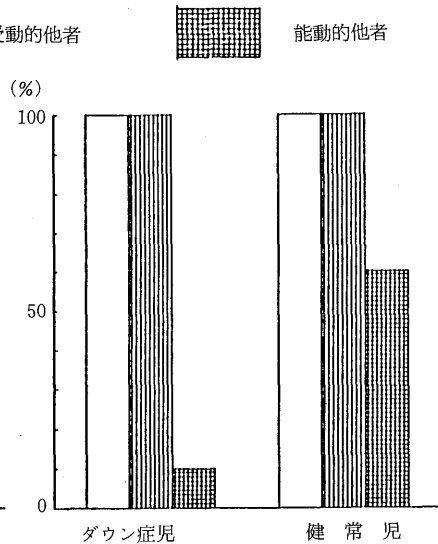


Fig. 4. 2歳6ヶ月群の
対象者の出現人数の割合

用は健常児群に比べ遅滞がみられた。

遊具の使用に関する出現順序として、模倣的使用が一番出現しやすく、見たて使用の出現は模倣的使用に遅れる傾向にあった。身ぶり使用の出現は見たて使用より明らかに遅れており、模倣的使用→見たて使用→身ぶり使用の順に出現が認められた。この出現順序はダウン症児も健常児も同じであった。

4) 遊びの対象者

誰を対象に象徴遊びが出現するか、自己、受動的他者、能動的他者の3つに分類して検討した結果を Fig. 3, Fig. 4に示した。自己対象は Fig. 3のように1歳6ヶ月群ですでにダウン症児、健常児全員に出現が認められた。受動的他者は Fig. 4のように2歳6ヶ月群でダウン症児、健常児全員に出現が認められた。能動的他者は健常児群では2歳6ヶ月で60%の者に出現が認められたが、ダウン症児群では10%の者に出現が認められたのみであり、健常児群にのみ有意な増加が認められた ($\chi^2=5.495$, $df=1$, $P<.001$)。つまり、ダウン症児は、自己対象、受動的他者は同一 DA の健常児とほぼ同じように出現するが、能動的他者は健常児群に比べ遅滞がみられた。

遊びの対象者に関する出現順序として、自己対象が一番出現しやすく、次いで受動的他者が出現する傾向にある。能動的他者の出現は、自己対象、受動的他者より明らかに遅れる。つまり、自己対象→受動的他者→能動的他者の順に出現が認められ、この出現順序はダウン症児も健常児も同じであった。

5) 遊び行為の連鎖

遊び行為の出現人数の割合を Fig. 5に示した。ダウン症児群も健常児群も2歳6ヶ月群で出現人数の増加がみられたが、健常児群にのみ有意な増加がみられた ($\chi^2=5.495$, $df=1$, $P<.025$)。

4. 考 察

先ず象徴遊びの量的側面(象徴遊びの出現率)についてであるが、ダウン症児も健常児も象徴遊びの出現率は変わらないという本研究の結果から、象徴遊びの出現量は DA に従がうと考えられる。1歳6ヶ月群と2歳6ヶ月群で出現率がほとんど変わらなかったという結果については、本研究とは手続きの違いはあるが、象徴遊びの出現率の伸

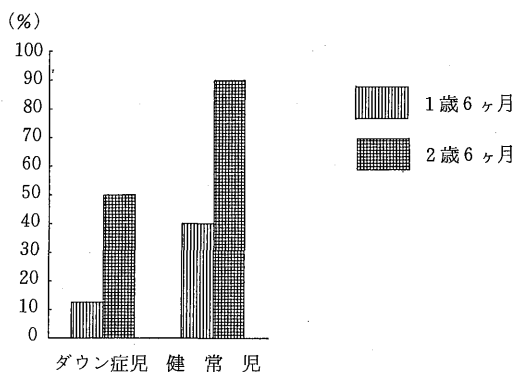


Fig. 5. あそび行為の連鎖の出現人数の割合

びは、18月以降比較的ゆるやかであったという Shimada の結果から、18ヶ月以降は象徴遊びの出現率はそれほど変化しないことが予測できる。

次に象徴遊びの質的側面(遊び行為の種類、遊具の使用、遊びの対象者、遊び行為の連鎖)について考えてみたい。先ず遊び行為の種類についてであるが、本研究で出現が見られた遊び行為は日常生活でよく行なわれる行為であり、DA 2歳台までの象徴遊びは身近な日常生活での経験を再現する傾向にある(陽田, 1982)といえよう。Nicolich (1981)は、異なった遊び行為の種類数は発達を示す指標となるとしているが、本研究の結果はこれを支持できなかった。これには、遊具の種類数や観察時間などの手続上の違いが考えられる。また、同一の遊び行為であっても異なった表現をしている場合もあり(「おもちゃのカップから飲む」も「飲む身ぶりをする」も両方とも「飲む」行為である)、単に遊び行為の種類数では発達を示す指標とはなりにくいと考えられ、さらに細かい指標を用いて検討することが必要と思われる。

次に、遊具の使用、遊びの対象者、遊び行為の連鎖についてであるが、本研究の結果、ダウン症児は発達的に高次レベルと考えられる項目へなかなか移行できず、発達的に低次レベルと考えられる項目に長く留まっている傾向が示唆された。つまり、ダウン症児の象徴遊びの質的側面は DA で予測されるより更に遅れる傾向にあると考えられる。しかし、各下位スキルの出現順序は健常児と同じであり、これらの結果は先行研究(Hill & Nicolich, 1981; 笹生, 1981)を支持したと考えられる。

以上をまとめると、ダウン症児の象徴遊びの発

達特徴として以下の点があげられよう。

- ① 象徴遊びの出現量は健常児と変わらず、DA に従がうと考えられる。
- ② 象徴遊びの質的側面では、発達の高次と考えられる項目がなかなか出現せず、DA を指標にしてもさらに遅れる傾向にある。
- ③ 象徴遊びの発達における下位項目の出現順序は健常児と同じである。

Piaget (1967) に従えば、本研究の結果はダウン症児の象徴機能の発達が DA で予測されるより遅れることを示唆していると考えられる。小椋 (1988) は、健常児 4 名を対象に研究した結果、象徴機能の発達の個人差には社会的相互交渉の発達との関連が予想されるとしている。ダウン症児の場合、早期からの全体的な発達の遅滞が認められ、これが社会的経験に制限を加え、DA で予測されるより象徴機能の発達が遅れることが考えられる。さらに検討が必要であろう。

近年、象徴遊びと言語発達との関連が示唆されており (Cunningham, 1985; Nicolich, 1981; 西村, 1984)、障害児指導への適用が試みられている (Jeffree & McConkey, 1974; McConkey & Jeffree, 1979, 1980)。象徴遊びの発達を促がすことが言語発達を促がすと考えると、ダウン症児の象徴遊びの出現順序は健常児のそれと変わらないという本研究の結果は、言語発達の発達を促がす指導に示唆を与えるものと思われる。しかし、ダウン症児で遅れがみられた発達の高次レベルと考えられる項目は、いつ頃出現するのか、また、各下位項目の出現と他の諸能力との関連など、今後、縦断的研究により検討していくことが必要であろう。

引用・参考文献

- 1) Cunningham, C.C., Glenn, S.M., Wikinson, P., & P. Sloper. (1985) Mental Ability, Symbolic Play and Receptive and Expressive Language of Young Children with Down's Syndrome. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 26, 2, 255-265.
- 2) Fein, G.G. (1981) Pretend Play in Childhood: an integrative review. *Child Development*, 52, 1095-1118.
- 3) Hill, P.M., & Nicolich, L.M. (1981) Pretend Play and Patterns of cognition in

- Down's Syndrome Children. *Child Development*, 52, 611-617.
- 4) 池田由紀江 (1982) ダウン症児の早期教育プログラム. ぶどう社.
- 5) Jeffree, D., & McConkey, R. (1974) Extending language through play. *Special Education*, 1, 13-16.
- 6) Jeffree, D., & McConkey, R. (1976) An observation scheme for recording children's imaginative doll play. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 17, 189-197.
- 7) 河原道夫 (1983) 子どものあそびと発達. ひとなる書房.
- 8) Lowe, M. (1975) Trend in the development of representational play in infants from one to three years: an observational study. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 16, 3-47.
- 9) McConkey, R., & Jeffree, D. (1979) First Steps in Learning to Pretend. *Special Education*, 6, 4, 13-17.
- 10) McConkey, R., & Jeffree, D. (1980) Developing Children's Play. *Special Education*, 7, 2, 21-23.
- 11) Nicolich, L.M. (1977) Beyond sensorymotor intelligence: assessment of symbolic maturity through analysis of pretend play. *Merrill-Palmer Quarterly*, 23, 2.
- 12) Nicolich, L.M. (1981) Toward symbolic functioning: structure of early pretend games and potential parallels with language. *Child Development*, 52, 785-789.
- 13) 西村学 (1984) 知的障害児におけることばの獲得と 2, 3 語発話の形成. *発達障害研究*, 5 巻, 4 号, 302-309.
- 14) 小椋たみ子 (1988) 初期言語発達と事物操作の関係についての縦断的研究. *教育心理学研究*, 36 巻, 1 号, 19-28.
- 15) Piaget, J. (1967) 遊びの心理学. 大伴茂訳, 明書房.
- 16) 笹生直江 (1981) 精神遅滞児における象徴的使用の発達. *日本特殊教育学会第19回大会発表論文集*, 80-81.
- 17) Shimada, S., Sano, R., & Peng, F.C.C. A longitudinal study of symbolic play in the second year of life. *RIEEC Reserch Bulletin (Tokyou Gakugei University)*, 12, 1-16.

- 18) Shimada, S., Kai, Y., & Sano, R. Development of symbolic play in late infancy. RIEEC Reserch Bulletin (Tokyou Gakugei University, 17, 1-24.
- 19) 嶋田征子 (1982) 象徴遊びの発達と治療教育への適応. 精神薄弱児研究. 290, 80-87.
- 20) Wing, L., Gould, J., & Brierley, L. M. (1977) Symbolic play in severely mentally retarded in autistic children. Journal of Child Psychology and Psychiatry, 18, 167-178.

Summary

A Study of Development of Symbolic Play in Down's Syndrome Infants.

Kaori Hosokawa Yukie Ikeda

The purpose of this study was to investigate the characteristics of the development of symbolic play in Down's syndrome infants.

The Ss were 18 Down's syndrome infants and 20 normal infants who were matched Developmental Age 18 months and 24 months. Their play with toys were recorded, then their behavior were analyzed.

The characteristics of the development of symbolic play in Down't syndrome infants were as follows:

- 1) The amount of symbolic play was the same as the normal infants. So, the amount of symbolic play follows Developmental Age.
- 2) In the quality of symbolic play of Down't syndrome infants, the play in the category of developmentally higher level hardly occured. So, the quality of their symbolic play was delayed by comparison to the expected from Developmental Age.
- 3) The order of occurence of sub-categories were the same as the normal infants.

Key word: Symbolic Play Down's syndrome Infant